
魔剣士少女リリカルなのは

食器野さら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔剣士少女リリカルなのは

【Nコード】

N2321V

【作者名】

食器野さら

【あらすじ】

恐怖の土台が再来し、緊迫する海鳴在住魔導師達。希望は二千年前すでに生まれていた。魔剣士の子孫、未だ健在。一度削除したものを大幅修正・変更して再投稿したものです。

プロローグ（前書き）

祝ッ！！復活ッ！！

プロローグ

二千年前。

人と悪魔の争いがあつていたころ。

一人の悪魔が正義に目覚め、劣勢だった人間を勝利に導いた。

時の流れの中で、彼の勇姿は忘れ去られていったが、その子孫は未だ健在である。

誇り高き魂は、脈々と受け継がれていた。

夜。

いくつものビルがそびえたっている。

その中の一つに、二人の人物が立っていた。

一方は中年男性で、もう一方は少女だ。

男性が口を開く。

「確かに、この地は力に溢れている……『あれ』を立てるには適しているが……いいのか？」

「別に構わないわ、ただ騒がれるのも面倒だから、海上に立てることになるけどね」

男性はつかの間黙ったあと、

「……『彼女』は、くるのか？」

「知れたことを……当たり前じゃない」

少女は嘲笑を込めて、言い切った。

「ふうむ……まあ、そう信じるとするか」

男性の、色が違う両目がギラッと光る。
続けてくつくつと笑った。

「しかし、悲願が叶うわけだな、わたしは支配者となり、お前は祖父を超える悪魔となる……」
「そうね」

笑い続ける男性を素っ気無く突き離す。
だが男性は気にした様子を見せなかった。
少女は夜の帳を見下ろして、静かに呟く。

「止められるもんなら止めてみなさい、姉さん」

「……?」

同じ頃、亜麻色の長い髪を持った少女が、夜空を見上げた。

束の間見つめるものの、苦笑いしながらため息をつく。

「まさか、ね」

そして少女が歩き出す。

周囲の壁は真つ赤に染まっており、そこら中に不気味に光る宝石が散らばっている。

一歩踏み出すたびに宝石は吸い寄せられ体に入り込むが、彼女は特に気にしていないようだった。

鼻歌を歌っていた少女は、ふと思い出したようにまた夜空を見上げる。

「今頃どうしてるかなー？あの子」

つぶやくと同時に、また息があつた異形を斬り捨て、撃ち抜いた。

我、英雄を受け継ぐ者。

契約は要らぬ、ただ護るために剣を振るわん。

力は我に、思いは刃に、

そして、

誇り高き魂はこの胸に。

魔剣士少女リリカルなのは

始まります。

J a c k p o t ! !

プロローグ（後書き）

短いのはプロローグの宿命だと思う（ドヤアツ!!）

というわけで、DMC（クラウザー様じゃないほうね）復活です。
主に3のストーリーを基にして進めていこうと思います。

第一話塔（前書き）

初めて予約投稿なるものを使ってみたり。

第一話塔

どうして、何でこんなことに……！！？
さっきまで『二人』のなのはちゃんが戦っていて、わたし達の友達
の方のなのはちゃんが危なくなつて。
それで気がついたら……！！！！

「な……..なのはあ！！！」

「いやあっ！！なのはちゃん！！！」

なのはちゃんの心臓に、刀が突き立てられていた。

ことの始まりは、二日前に遡る。

「海上に魔力反応？」

「塔って、何なん？」

突然ハラOWN宅に集められたなのは達。

一通りの説明を聞いた後、フェイトとはやての第一声がそれだった。召集した張本人であるクロノは、黙って肯定してから、

「つい先日のことだ、塔には認識障害もかけてあるらしく、幸い一般人には感づかれていない」

説明しながらパネルを操作して、画像を呼び出す。

表示された画像には、上空から撮ったらしい塔が写っていた。

「？全体がよう見えんけど、横から撮ったのは無いん？」

「無い、一応先日撮りにいかせたんだが……………」

クロノは語るのを渋っているらしく、少し黙り込んでから、

「撮影に向かった5名全員、死亡した」

「……………!？」

驚愕のあまり、身を乗り出したのはヴィータ。

はやてがそれを制したのを見届けてから、クロノは続ける。

「その局員達が、最後に送ってきた音声があるが……………聞か？」

全員が顔を見合わせてから、頷いた。

クロノも返事代わりに頷いて、再びパネルを操作。

ファイルを開き、再生する。

『こ、こちらアルファ1！現在未確認生命体に襲撃を受けている！
奴ら、頑丈すぎて、魔法じゃびくともしない！』

通信状態が悪いのか、雑音が所々に混じっているが、状況はかなり
緊迫しているようだ。

『スパードはどこだあ！？』

『つうぐああ！！』

「・・・・・・・・・・！」

突然割り込んできた人外の声。

ここに来て、今まで黙り込んでいたなのはが初めて反応を示した。

『みつ、未確認の画像を送るっ！今後の捜査に少しでも役立てっ・
・・・・・・・・』

ブツリっと、音を立てて通信が途絶えた。

重い空気になる中、クロノはまたパネルを動かして、塔とは別の画
像を表示した。

「・・・・・・・・・・これが、先ほどの通信の直後に送られてきた画像
だ」

酷くぶれていてはつきりとは見えないが、全体的に黒く、紅い鎌の
ような物を持っているのが分かる。

その奥の方、よくよく見ると、同じ種類と思われる未確認に、頭と
胴体を裂かれている局員の姿があった。

幾人かは口を抑えて、無意識に目をそらす。

クロノもこれ以上表示する意味はないと思ったのか、すぐに画像を
閉じた。

「・・・・・・・・・・以上が、先日起こったことだ」

まだ暗い全体を見渡してから、一呼吸置いて、

「これより、アースラの任務はあの塔の調査と未確認の討伐になる、全員、心してかかるように」

その日は、そこでお開きになり、全員が暗い面持ちで立ち上がり、帰宅を始めた時。

黙っていたなのはが、ぼそつと呟く。

「・・・・・・・・・・テ・・・・・・・・・・グル」

「え？」

すぐ近くにいたフェイトが反応。

はやて含む他のメンバーも、単語が聞き取れなかったものの、何かを呟いたというのは理解した。

視線に気づいていないらしいのはは、若干うつむいて考え込む。ぼそぼそと呟き続けて、何かを理解したような表情になった。

途端に顔を上げて、

「・・・・・・・・・・そっか、来てるんだ」

どこか嬉しそうに、微笑んだ。

「じゃあ何？なのは何か知ってるっぽいの？」

「そうなんよ、けど、何も教えてくれんしなあ……………」

そうこぼしながら、はやてが見つめた先。

自席で、本を呼んでいるのはが居た。

題名は『魔剣士伝説』、彼女がよく読んでいる本である。

かなり集中しているらしく、こちらの視線には気がついていない。

「結局昨日もはぐらかされちゃったしね」

「せやね、って言うか、なのはちゃんって、あんなに受け答え上手かったっけ？」

思い出すのは、昨日のやり取りの一部。

あの塔は何や！？

さあ？案外『スカイツリー』って名前だったりするかもね？

こっちはまじめに聞いてるんだけど？

わたしは不真面目に答えてるよ？

「それになのはちゃんの雰囲気、あの間だけがらっと変わってたよ
うな……………」

「ふうん？」

「……本来、仕事の内容を一般人に話してはいけないのだが、はやてやフェイト達は、よく相談している。

捜査で悩み事が出来たなのは達を、すずかやアリサが相談に乗って、ガス抜きをする。

そんな感じでなのは達の精神的な支えになっているので、クロノもこのことに関しては目を瞑っていた。

「ま、大丈夫でしょ、本当に何か知ってたとしても、わたし達を氣遣つてのことかもしれないし」

「うん、なのはちゃん、昔からそういうところは不器用だから……」

五人の中で、一番なのはと付き合いが長い二人からの言葉に、はやてとフェイトも安心した笑顔を見せた。

「それはそうと……」

と、話がひと段落したところで、アリサが切り出す。

「あの子、どんだけ魔剣士好きなのよ？」

「もう結構長い間読んでるよね」

そう言つて、視線がなのはが呼んでいる本に移る。

已然なのはは視線に気がついていないらしく、ただ黙々と文章に目を通していた。

「というか、そもそも『魔剣士』って何？」

「二千年前に悪魔達が侵攻してきた時に、魔界を裏切つて人間に味方した悪魔のお話だよ」

フェイトの疑問にすばやく答えるすずか。

本に関しては彼女に聞いた方が手っ取り早く、分かりやすく解説してくれるので、本を探したりするときには必ず頼る。

「それに確か『魔剣士』は称号で、本当の名前は……………」

後に、はやてはこう語る。

「『スパーダ』」

『二千年前から、全てが始まっていた』と。

その日の放課後。

アリサとすずかは一緒に下校しながら、改めてなのはについて話していた。

「にしても、今思えば、あの子について結構知らないことって多いわよね?」

「うん、もう八年になるから、あんまり気にしてなかったけど……」

当時のことを思い出しながら、二人は会話を続ける。

「なのはって、わたしが小一の時に転校してきたでしょ？そもそもなんで転校してきたの？」

「結局教えてもらってないもんね」

「そうそう、まあ、当時のわたしとしちゃ、結構生意気って言うか、どこか陰気って言うか」

苦笑いしながら言うアリサ。

「すずかはくすくす笑いながら、

「でも、行動力はあったよね、覚えてる？わたし達が友達になった切欠」

「覚えてるも何も、忘れられないっての！それまで引ッ込んでるっていうか、誰とも関わらなさそうな子がいきなり引ッ叩いてきたんだもん」

痛い？でもね、大切なものを取られた人はもつと痛いよ！！

当時のなのはを思い出しながら、「そういえば」、とアリサが気づいた。

「今さら気がついたんだけど、あの頃のなのはって、土郎さん達に對して若干他人行儀なところがあった？」

「うん、結構敬語とか使ってたよね」

当時のすずかはともかく、アリサとなのはは親を呼んでの大騒ぎになるはずだったが、二人の父親達は、自身の娘だけを叱ることにしていたため、そこまで大きくはならなかった。

その時叱られていたアリサが、何となくなのはの方を見ると、他人

行儀な敬語で士郎に謝っていたのが見えた。
それが妙に頭に残っている。

「それにさ………実は、すずかには話してなかったんだけど………」

「うん？」

少し語るのをためらってから、アリサは口を開いた。

「もしかしたら、なのはに兄弟がいるかもしれない」
「………うん？」

唐突に告げられたことに、すずかは先ほどと同じ反応を返した。
どういうことだ、という視線を受けながら、アリサは続ける。

「いや、ほら、四年くらい前かな？その………なのはが大怪我したの」

「あ………うん」

「その時にさ、なのはの部屋を掃除に行ったじゃない？」
「行った行った！せめて帰ってくる場所だけでもって」

アリサは頷いて、

「その時にさ、机の上の、わたしが来るときにはいつも倒されてる写真たて、あるじゃない？あれの下も掃除しようって、触ったときに、その………」

「………もしかして、見たの！？」

「う、うん」

すずかはよっぽど驚いたらしい。

珍しく大声を上げた。

「・・・・・・・・ここにさ、白髪の男の人と桃子さんらしき人、なのはと、それにそっくりな子が写っていたの」

「え、それじゃあ・・・・・・・・でもだったら、今はどこにいるの？」

「さあ？・・・・・・・・でも、もしかしたら転校の原因って、その男の人となのはそっくりの子かもしれない」

真剣な面持ちで、アリサがそう仮説したとき。

「あなたたち、アリサ・バニングスと月村ずかであってる？」

突然、後ろから声をかけられた。

『それじゃあ、改めて任務の説明をするよ！』

エイミィの通信を聞きながら、一同目の前の塔を見つめていた。

あまり近づきすぎると、先日のような未確認に襲撃される可能性があるため、かなり離れた場所で待機している。

『今回はあの塔に潜入して、民間人二人の救出すること！それと、未確認に襲われた場合、非殺傷設定を解除していいから！』

シグナムはカートリッジを補充し、ヴィータはグライフアイゼンを肩に担いで、シャルマルはクラルヴィントをいつでも発動できる状態にし、はやてはリインフォースとユニゾン、フェイトはバルディッシュを構えて、なのはは黙って塔を見つめていた。

『恐らく塔に近づけば近づくほど、未確認との接触率が高くなる！各自心してかかれ！』

「了解！」

返事をして通信をきると同時に、全員が飛び出した。

閑話休題。

塔に近づくにつれ、空気が突き刺さるような感覚がする。

恐らく、先日の通信や画像にあった未確認のものと思われるそれを全身に受けながら、一同はなおも飛行する。

すると前方、塔の手前の方から何かが大量に湧き出てきた。

全員その場に停止し、個々の武器を構える。

「・・・・・・・・・・・・・・・・来た」

誰かがそう呟くと同時に、そいつらは現れた。

真っ黒な衣のようなものを纏い、顔と手は赤く、空のような夜のような目は、確実にこちらを捉えていた。

ふと、その内の一体が顔を上に上げて、何かにおいを嗅ぐような仕草を見せる。

そしてはっとなったように顔を戻し仲間に向く。

狂ったように叫びだす。

『スパードー!!』

『スパードー!!』

『スパードー!!』

『だがダンテはいないぞ!?!』

『しかしこの二オイはスパードー!!』

しきりに『スパードー』の名前を合唱し、拳句の果てには隊列を乱すが、次の瞬間、動きが止まった。

未確認達の視線が、一点に集中する。

一番前にいた一体が、それを指差して叫んだ。

『スパードー!!』

『そこにいたか!裏切り者!!』

その言葉を合図にして、一斉になのはに飛び掛る。

「・・・・・・・・っ!」

一方のなのは達は隊列を崩さずにいたため、すぐに障壁を展開。鋭い指での突きを防御する。

続けてヴィータの一撃とシグナムの一閃が未確認に浴びせられるが、攻撃は黒い体をすり抜けた。

『気をつけて!その黒い部分はガス!頭が本体だよ!!』

「っはあ!?!」

「面倒な敵だな」

上に飛び上がって攻撃を避けて、エイミィからの通信に目を見開いた。

「いくで！リイン！フェイトちゃん！」

『はいです！』

「わかった！」

フェイトとはやては魔方陣を展開。

素早く詠唱して、氷の槍と雷の槍を出現させる。

二人一緒に、杖を振り下ろすと同時に号令を下し、容赦なく未確認に攻撃を加えた。

水蒸気と煙に隠れ、視界が悪くなってしまう。

だが威力は相当のもの、何らかのダメージは

「・・・・・・・・っ！！！」

煙の向こうから、無数の指。

はやてとフェイトはとっさに防御するものの、何箇所かを簡単に碎かれて軽傷を負う。

一瞬怯み、そこへ容赦なく攻撃が加えられる。

「はやてちゃん！フェイトちゃん！」

なのはが飛び出し、二人まとめて無理矢理突き飛ばした。

「なのは！？」

「なのはちゃん！！」

身を案ずる二人の心配を他所に、指がなのはの脇腹や頬など、体の数箇所を掠める。

痛みに顔を歪めて、俯くなのは。

『スパーダア！』

「なのは！っこのヤロー！！」

ヴィータが咆哮し、なのはの前に躍り出て未確認たちを追い払う。
だが背後から接近した指に気づかず、もろに脇腹に喰らった。

「うぐっ……………」

「……………っ！」

なのははばつと顔を上げて、負傷したヴィータを目に捉えると、

「ああ、もう我慢できないや」

口角を吊り上げて、諦めたようにそう呟いた。
次の瞬間、一陣の風が吹き抜ける。

「・・・・・・・・っ!？」

未確認の一体が、ガス体から引きちぎられ、その醜い姿を露にした。
驚づかみにされているそれは、必死になってもがいている。
動きが見えなかったが、一同が驚いたのはそこではない。
その捕らえ切れなかった動きを行ったのは、

「なのは？」

なのはは未確認を掴んだまま、微動だにしない。
直後、

グシャッ

徐に、未確認を握りつぶした。
なのはがとつた突然の行動に、困惑と混乱が広がる。

「な、なの・・・・・・・・」

「効率悪くない？」

声をかけようとしたフェイトを無視。

悪魔の亡骸から出てきた紅い石を握りながら、未確認たちに話しかける。

「わたしが目的なら、わたしだけ狙えばいいじゃない？どうしてアリサちゃんとすずかちゃんを？」

どこかおどけた様子で未確認に問いかけるなのは。

一方の未確認たちは、それに攻撃で答えた。

先ほどまでのものよりも、速く、鋭い突き。

なのははそれを簡単そうに避けながら、ため息をつく。

「そう、ならお偉いさんに直接聞くよ」

再び一陣の風。

未確認達の動きが停止すると共に、塔の方に近づくのは。

その服装や武器は、大きく変わっている。

白いコートに黒いズボン、胴体のインナーは普段のバリアジャケットと同じだが、全体的に男のような格好をしている。

そして極めつけは、彼女の愛機レイジングハートだった。

杖の形をしているはずのそれが、白銀の刃を携えた巨大な剣になっている。

そしてその刀身には、わずかに血がついていた。

なのはの目の前には、『最後の一体』の未確認。

おびえた様子でこちらをみる相手に対し、腰から真っ白なそれを取り出して銃口を向ける。

そして不敵な笑みを浮かべながら、

「Jack Pot!!」

一気に、未確認が全滅。

なのは慣れた手つきで銃を振り回し、そのままの勢いでホルスタ
ーに収めた。

呆然とする一同に振り返り、満面の笑顔を向けて、

「そういうわけだから、みんなは関わらないでね？これはわたしの
問題だよ」

おどけた様子でそう告げると、さっさと先に進んでしまった。

第一話塔（後書き）

というわけで一話でした。

誤字脱字、ツッコミがあれば感想へどうぞ。

第二話危機、上と下（前書き）

調子について、もういっちょ。

第二話危機、上と下

銃弾が舞い、刃が踊り、鮮血が散る。

白いコートが汚れるのを気にも留めず、なのはは突っ走っていた。

目の前に、敵。

なのはは勢いを殺さずに飛び上がると、壁を伝って駆け上がっていく。

そして後ろに回った瞬間、鉛弾を撃ち出した。

蜂の巣になった敵に目もくれず、なのはは再び駆け出す。

あのあと、フェイト達より早く塔に到着したなのはは、まっすぐに頂上を目指していた。

立ちほだかった敵は即座に斬り捨てたため、彼女が通った後には大量の砂と血痕が残されている。

閑話休題。

やがて、目的地の頂上が見えてきた。

いてもたってもいられなくなったのか、なのはは目の前にいた敵を倒さず踏みつけて進む。

そして最後にいた死神を思わせる巨大な敵をも踏み台にして、大きく跳躍した。

それなりに高く上がったお陰か、頂上の全体が見渡せる。

円形の床の隅の方に、アリサとすずかを発見。

向こうはこちらに驚いているようだが、なのはは二人が無事であることにほっとする。

次に、円の中心近くにいた男を確認。

聞いていた通りの容姿と一致し、また彼について何か思い出したのか、眉間にしわがよっていた。

最後、円の中央。

自分と同じ亜麻色の髪を揺らし、自分と同じ顔立ちの少女が、刀を携えて立っている。

滞空している数瞬の間に、これら全てを確認したなのはが着地したと同時に、少女がゆっくり目を開いて、なのはを見つめた。

「・・・・・・・・久しぶりね、なのは」

「うん、久しぶり、桜夜^{さくや}」

立ち上がりながら、なのはは笑って答えた。

それから辺りを見回してから、両手を使いおどけた仕草を見せて、

「なんでアリサちゃん達を拉致ったのかな？」

「扉を開くには生贄が必要よ」

「扉って・・・・・・・・魔界はおじいちゃんが封じた、そりゃ一度は解かれたけど、そこはお父さんが何とかしたはずでしょ？」

すると少女　桜夜は、刀を構えて、

「だから開くの、もう一度開いて、わたしは完全な悪魔になる」

「・・・・・・・・いや、そこは完全な人間になるって言うておこっ？」

「嫌よ・・・・・・・・忘れたわけじゃないでしょ？力があればお母さんを・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

二人はそれっきり、黙ってしまった。

が、やがてなのはが口を開き、

「もう過ぎたことだよ、それに、今また扉を開けば、今度こそ世界は悪魔に……」

「多少の犠牲は病むを得ないわ」

「世界一つを多少つて……大物になったねえ」

しみじみと、なのはが言った瞬間。

桜夜がなのはの目前に現れた。

直後に、金属音。

「いきなり？大胆さも兼ね備えたかな？」

「この塔が何かを知っているあなただからこそ、消えてもらうついでに……」

「やだよ、これはわたしの、自分のを使えばいいじゃない」

両手で二丁銃を回転させながら刀をいなし、距離を取る。

背中に収めていたレイジングハートを抜き放つと、刃を打ち合わせた。

「二つ無いと意味を成さないの」

「だったら諦めなよ、アリサちゃん達も解放してくれるとうれしいな」

「出来ない相談」

「残念！」

軽口のような口調で話しているものの、体は殺伐としたやり取りを行っている。

弾き飛ばし、振り下ろし、横に薙いで、斬り上げる。

「腕は落ちていないようね？さぞ平和なところにいたんだから、鈍ってやしないかと冷や冷やしてたわ」

「にははは、だってこっちの都合なしに『みんな』よって来るんだもん、落ちるものも落ちないって」

「それもそうね」

突然、桜夜が何かの銃を取り出して、発砲。

なのはも負けじと銃を構えて、飛んできた弾丸を全て撃ち落す。

「銃、使わないんじゃないの？」

「戦略的には持っていたほうがいいの」

「なるほど」

銃を仕舞わないまま、なのはは続けて発砲した。

が、桜夜は回避行動を取らず、刀を下に構えると、くるくると回し始めた。

刀が描く軌跡に絡め取られ、弾丸が受け止められていく。

そしてそれを地面に並べると、刀を大きく振って、弾き飛ばした。

なのはに向かう、無数の弾丸。

しかしなのはは慌てる素振りを見せず、むしろ不適な笑みを浮かべて、レイジングハートを振り下ろす。

弾丸が全て切り裂かれ、なのはの後ろにあつた柱を破壊した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・何？これ」

一連の出来事を見守っていたアリサ達は、呆然とするしかない。

確かなのはは、砲撃中心の後衛タイプだったはず。

それがどうだ？普通に大剣を使っており、しかもかなり高レベルの斬り合いを行なっているではないか。

「……………どーなってるのよ」

塔の事と言い、目の前の二人のなのはの事と言い。

手を縛られているというのに、頭を抱えてしまったアリサだった。

塔の下層。

開けた空間に、フェイトは一人で立っていた。

なのはが変貌して先行した後、あの異形達が市街地に向かって突進を始めてしまい、それを抑えるためにとどまる必要が生まれてしまったのである。

しかし、仲間であり重要参考人でもあるなのはを放っておくわけにも行かない。

その折り合いが付く点として、フェイトが塔に向かうこととなった。現在、塔の一階と思われる場所にいる。

「……………静かすぎるような気が」

猫、鳥一匹いない。

変わりに、背筋を撫でるようなねっとりとした気配が蔓延していた。一瞬怯んだものの、フェイトは唇をかみ締め、表情を引き締めてから前に進む。

進もうとして、足を止めた。

「・・・・・・・・・・？」

背後から、何かが動き回る音が・・・・・・・・・・。
はっとして後ろを振り返ると、

ッ！！

見事な大口があつた。

間一髪のところまでよけたフェイトだが、床が砕けている光景を目にして、サツと血の気が引く。

しかしすぐに気を引き締めると、目の前の敵を見据えた。

百足を思わせる、巨大な虫。

今しがたフェイトを捕らえかけた巨大な顎は、中が青白い。

フェイトは、相手の全身から滲み出ている威圧感に後ずさりしかけるが、バルディッシュを振りかぶって果敢に挑む。

「ハーケンセイバー！」

大きく振って刃を飛ばすが、百足は身体を震わせて弾き飛ばした。どうやらあの甲殻は、かなり頑丈らしい。

おかえしと言わんばかりに、身体の節目から紫色の光弾を乱射した。フェイトはそれを回避、バルディッシュに命じカートリッジを消費すると、自身の周りに金色の短槍を出現させると、発射した。

が、それも弾かれ、フェイトは強烈なタックルを受けた。
遠く吹き飛ばされ、壁に叩きつけられる。

続けて、また口を開き食いつこうとする百足。

流石に追い詰められたかと思いきや、フェイトは咄嗟に頭を下
げ、自分から床に落下。

全身を打撲したが、回避には成功。

必死に物陰へ駆け込む。

百足はフェイトを見失ったらしい、しばらくの間キョロキョロとし
ていたが、やがてその場を去っていった。

「・・・・・・・・・・はあっ・・・・・・・・・・はあっ・・・・・・・・・・」

二度も死に掛けたことが堪えているのか。

フェイトは体を抱きしめて、しばらく震えていた。

『Are you okay? sar』

「・・・・・・・・・・ごめん、大丈夫」

バルディッシュにそう答えてから、立ち上がった。

辺りを見回してから、百足の不在を確認し、ほっとする。

そして周囲を警戒しながら、進み始めた。

「ふっ！」

「やつ！」

未だに続く、なのはと桜夜の戦い。

銃撃も加えられていた戦いは、もはや剣術のみのぶつかり合いになつていた。

刃同士が打ち合い、時折耳にくる音を立てる。

両者ともに一旦退くと、なのはは下に振り下ろす一閃を、桜夜は上に振り上げる一閃を繰り出す。

そして、一際大きな金属音が響いた瞬間。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

派手に回転しながら宙を舞うレイジングハート。

ポタポタと、真っ赤な血が地面に落ちる。

今でこそ流れ出る量は少ないが、アリサとすずかを驚愕させるには、十分すぎた。

「・・・・・・・・・・ぬるま湯に漬かりすぎたわね」

「・・・・・・・・・・そーかも」

口元から血を流しながらも、なのはは笑みを絶やさない。

桜夜は冷たい目でそれを見下ろすと、刀を抜き放った。

血が撒き散らされ、アリサとすずかは声がでない。

なのはが倒れる間際、首元に光るものがあつた。

俗に言う『アミュレット』と呼ばれるそれを、桜夜はもぎ取る。

何とか阻止しようとしたのか、なのはが手を伸ばしたが、刃を以つ

て邪魔され、叶わない。

「い……………や……………つ!!」

「いやぁ!!なのはぁ!!」

仰向けで倒れたなのはに駆け寄るアリサとすずか。

未だ血が流れている腹部を必死に押さえながら、アリサは桜夜を睨みつけた。

「……………何？」

「何でなのはを!？」

「邪魔だから、としか言えないわ」

なのはから回収したアミュレットを男に渡しながら、桜夜は振り返りもせずに淡々と返事する。

「……………っ！」

頭に血が上ったアリサは側に突き刺さっていたレイジングハートを抜いて、桜夜に向けた。

桜夜は黙ったまま、刀に手をかけて、

「……………止めを刺しておきましょうか？」

アリサの横を、風が吹き抜けて。

後ろの方で、何かが突き立てられた音がした。

調査を進めていたフェイトは、廊下の突き当たりに何かあるのを発見する。

気になった彼女は、バルディッシュを構えて周囲を警戒しつつ、奥へと進む。

そこには、心臓に剣を突き立てられ、苦しんでいる女性の像があった。

「……………趣味が悪い」

思わずそう呟いた時、

『我が名はアラストル』

「……………っ!？」

振り向いても、誰もいない。

空耳かと思ひ来た道を戻ろうとしたが、

『力無き者はその心臓を贄とし、我に永遠の服従を誓え』

今度は、はっきり聞こえた。

どこから語りかけてきているのかと、もう一度振り返った瞬間。ドスッと、胸の辺りに衝撃が来た。

「あ・・・・・・・・・・・・・・・・あ・・・・・・・・・・・・・・・・!!」

すずかの腕の中。

なのはが、胸の中央に刀を突き立てられている。

桜夜は機械の様な冷たい表情のまま、柄を捻った。

「・・・・・・・・・・ぐ・・・・・・・・・・・・・・・・あつ・・・・・・・・・・・・・・・・!!」

なのはの口から、苦い声が漏れて。

それっきり、何も言わない。

「なのはちゃん・・・・・・・・・・?・・・・・・・・・・なのはちゃん・・・・・・・・・・?」

すずかが、恐る恐る声をかける。

なのはが死ぬはずないと、自分に言い聞かせながら、話しかける。
だが半開きになったなのはの口は、動かなかった。

涙が、ボロボロこぼれて来る。

どうして、こうなった。

どうして、こうなった。

その頃、海上。

必死に防衛ラインを張っている守護騎士とはやて達は、目の前の異形に苦戦していた。

少し前からさらに、鎌を振りかざす、まさに死神と言える容姿の固体が加わったからである。

標的を指で刺すだけの異形とは違い、鎌を持ち、時折瞬間移動を使って背後に回りこむ。

他のものにすら決定打を見出せていないというのに、さらに頭脳プレーまでしてくるといふのは、正直致命的だ。

「っしまった！」

そしてついに、異形のうちの一体がラインを突破して、市街地に向かう。

追撃しようにも、今離れてしまえば、確実にラインは崩れる。

全員が、苦虫をつぶした表情になったときだった。

どこからともなく、ヒューン、と笛のような高い音が近づいてくる。

直後、

派手な音を立てて、ラインを抜けた異形に何かが命中し、これまた派手に爆散する。

「・・・・・・・・つ!!」

はっと、飛んできた方向を振り向くと、

「命中よ!」

波間を爆走しているジェットスキーが見えた。

二人の女性が跨っており、内の一人が未だ煙を履いているロケットランチャーを構えている。

一瞬ぽかんとする一同、だがすぐにはやてが声を張り上げた。

「あかん!この先は危険や!退いてください!!」

しかし、女性達は耳に入れず、というか、はやてを見ようとせず、さらにスピードを上げる。

すると、ジェットスキーを運転していた金髪の女性が、ハンドルから手を離れた。

あの塔に突っ込むことと言い、爆走中に手を離すことといい、

(なんちゅう無茶苦茶やる人達や!!)

「だめ!逃げて!!」

もはや悲鳴に近い大声で、叫んだとき。

プラズマが走り、雷のごとく空気を裂いて、ほとんどの異形を一掃する。

「・・・・・・・・ふえ？」

呆然としたはやてから出てきたのは、そんな間抜けな声だった。

第二話危機、上と下（後書き）

若干グダグダな気がするけど、気にしないでもらえるとありがたいです（苦笑）

今回あのお二方が登場。

あと、心臓に剣が刺さるのは恒例行事だと思っているわたしって何でしょう？

第三話復帰（前書き）

思ったより速くネットが復活できました！！！！

第三話復帰

「・・・・・・・・」

血だまりを広げながら、かろうじて生きている思考回路で考える。
今自身の胸に突き刺さっている、銀色の剣は、一体何なんだ？
疑問を口にする体力は無い、なので、それに答えをもらえることも
無かった。

だんだん冷たくなっていく体、視界と一緒に思考もぼやけてきた。

『やはり、人間ではだめか・・・・・・・・あの男が懐かしい』

あの男　　誰なんだろう？

そこでフェイトは、意識を手放した。

必死になって、現実を受け入れようとしていたすずかの思考が、中
断する。

いや、中断するというより、止められた、が正しい。

すずかの首に手刀を入れた桜夜は、傾いたすずかの体を受け止めて、
抱き上げる。

それから男のほうを振り向いた。

「あとはどうする？」

「贅はお前が抱えているほうの娘でいいだろう、そこで呆けている娘は元々、そいつをおびき寄せる餌だからな」

「そう」

桜夜は素っ気無く返事して、男の下に歩いていく。

「後は悪魔達が始末するだろう、放っておいて構わんよ」

最後に男がチラツとアリサとなのはを見てから、嘲笑をこめてそう言い放ち、桜夜とともに去っていった。

「・・・・・・・・なのは・・・・・・・・!!」

やっと立ち直ったアリサは、動かなくなったなのはに駆け寄り、手を握る。

幾分か熱が残っているとはいえ、ぞっとするほど冷たい。

「ごめんね・・・・・・・・あたし等のせいで・・・・・・・・ごめんね・・・・・・・・!!」

涙ながらに、謝罪を繰り返した。

魔法のことを知っているだけで、それ関係の才能が無い、相談に乗ることしかできない自分が齒痒かった。

何故自身に力がないのかと、悔やんだ。

『死人に口無し』の通り、なのはは蔑みも慰めもしない。

それでも、アリサは謝らずにはいられなかった、後悔せざるにはいられなかった。

すっかり冷たくなった手を、わずかに残った熱を守るように、必死に握っていた。

そんなとき、周囲に気配。

背筋をなぞる、ねっとりとした感覚。
ぱつと顔を上げると、囲まれていた。

鎌を盛っていたり、棺桶を抱えていたり、人の形をしているものの、人ではないもの達が、まるで品定めするように見ている。
赤く鈍く光る全ての目が、確実にアリサを捕らえていた。

「　　っ！！！」

本能的に恐怖を感じたアリサは、思わずレイジングハートを構えた。
大剣故のずっしりとした重みが、アリサの華奢な両腕に負荷をかける。

アリサは一瞬表情を歪めるものの、すぐに表情を引き締めた。
分かっている、剣どころか、何の武術もかじっていない自分が、すぐに死ぬのは分かっている。

だが、少しでも抵抗の意思を見せないと、なのはに申し訳ない気がした。

「・・・・・・・・ちよつとだけでいい、力を貸して、なのは・・・・・・・・」

そう懇願した瞬間、異形達が飛び掛ってくる。

夢を、見ていた。

いつか、闇の書に閉じ込められたときに見た、夢。

自分も、アルフも、アリシアも、リニスも母も。

みんなが笑って、穏やかな時間を過ごす、そんな夢。

だが、少し内容が違っていた。

みんなで街にショッピングに出かけた直後、あの異形の群れが襲いかかってくる。

アルフ、母、リニスが必死になって守ってくれるものの、決定打を与えられずに、傷ついていく。

やめろ

貫かれるリニス。

やめろ

不意をつかれて死ぬアリシア。

やめろ

駆け寄ろうとしたアルフも絶命。

やめろ

最後に残った母も、自身を庇って死んだ。

異形達は嘲笑うようなうるさい鳴き声をあげる。

自身の周囲には、四つの屍が転がった。

そこで、フェイトは気がつく。

自身のような、母さんのような人間は、生み出してはならない。

あの日なのはに手を取ってもらったように、自分も手を取ると決めたのだ。

何の恩も返せず、こんな石造りの床の上で寝転がるのが、望んだ最

期か？

否！！

「・・・・・・・・つ」

立ち上がれ、フェイト・T・ハラウン。

「・・・・・・・・ぐあ」

こんな所で這い蹲るな。

「・・・・・・・・が、あっ」

立ち上がれ、立ち上がれ。

「・・・・・・・・ああ」

少なくとも、ここが終着点ではない！！

「あああああああああああああああ！！！！」

突き刺さっていた剣を力ずくで引っこ抜き、咆哮をあげる。

『なんと・・・・・・・・人間の小娘が、我を振るう資格を手にしたと
いうのか！？』

覚悟を決めたアリサが、レイジングハートを振り回そうとした瞬間。すぐ背後で破裂するような音がして、異形を一気に何体も葬る。何事かと振り向いたアリサの手からレイジングハートが没収されて

「Blast!!」

目の前を、異形が吹き飛んでいく。視界に広がるのは、真っ白なコート。それはこちらを振り向いて、いたずらっぽい笑みを浮かべた。

「アリサちゃんごめんね、お待たせ!」

「.....っ!?!」

アリサはかなり驚いた表情で、先ほどまでなのはが倒れていた場所と、今なのはが立っている場所を交互に見る。そんな彼女を見て、なのはは苦笑いして、

「ごめん、ちよつとびつくりしたかな?」

『A dove becomes the expression that Gatling drank (鳩がガトリングぐらつたような表情になっていますよ)』

笑顔のまま、後ろの異形を斬り付ける。

「もー、ちよつとは空気読んでよ!せっかく再開を喜んでたのに!」
『You must die!!(いつそおっ死ね!!)』

慣れた手つきでレイジングハートを振り回し、アリサと自分に寄ってくる異形をことごとく斬り伏せる。

すると、徐にレイジングハートをブーメランのように投げつけ、ホルスターに収めていた銃を取り出した。

開いた片手で戻ってきたレイジングハートを背中に収め、さらにもう一丁銃を構えて、

「今飴玉は切らしてるの！鉛玉で良ければたっぷりどうぞ！」

It is taste slowly and carefully
Ily!! (じっくり味わいな!!)

まさに雨あられ。

嬉々とした表情で撃ち出されたのを目の当たりにしたアリサは、後
にこう語っている。

「……銃って、あんなに連射できるんだね」

「……はあつ……はあつ……はあつ……」

まだ痛む胸を押さえながら、フェイトは先ほど抜いた剣を支えに蹲

る。

乱れた息を整えながら、自身の手に収まっている剣を見つめた。

『まさか、あやつ以外で我を従える人間がいるとは……驚嘆に値するぞ、小娘、名は何と言う？』

「はあ……は……っフェイト、フェイト・Ｔ・ハラウン」

『フェイトか、我が名はアラストル、雷の魔剣ぞ！！』

雷。

真っ先に考えたのは、自分にぴったりだということ。

もちろん長年の相棒バルディッシュも自身に合わせて作られた愛機だが、目の前のアラストルと名乗った剣は、少し違った。

バルディッシュと違い、手にした瞬間、自身の物だと理解できたのだ。

何故だか分からない、理由の付けようのない感覚に少し戸惑うものの、新たに手に入れた力だ。

ありがたく使わせてもらおうと、フェイトは考えていた。

バルディッシュとアラストルを手に進みを進め、先ほど百足に襲われた広間に出たとき。

「……っ！？」

『ウキヤキヤキヤキヤッ！！』

一瞬、反応。

先ほどまでフェイトがいた場所に、鎌が突き立てられていた。

真っ赤な外装のそいつらは、鎌を抜きながらフェイトを見据えてゆらゆらと動く。

『ほう、ヘルラストか』

「っ知ってるんですか!？」
『もちろんだ』

異形 ヘルラストというらしいそいつらの攻撃を避けて、フェイトは大きく跳躍。
後方に下がって、構える。

『ちょうどよいフェイト、我を振るえ』

「え？」

『お前のそれを侮辱するわけではないが、そいつよりは役に立つぞ?』

右手に持っていたバルディッシュに目をやる。

確かに、こちらが扱う魔法はあまり効いていなかったが……。

目前に迫るヘルラストと、両手の武器を見つめて、少し考え込んだ後。

「……バルディッシュ、モードリリース」

『Yes』

戦斧が逆三角形のプレートとなり、左手に収まったのを確認して、アラストールを構える。

「アラストール、お願いします、バルディッシュは補助を！」

『承知!』

『Yes ser!!』

足に魔力を込めて、駆け出した。

不規則な機動を描く鎌の間をすり抜けて、すれ違い様に一閃。

すると、ヘルラストは面白いほど綺麗に、真つ二つに斬れた。先ほどまでとは違う結果に、フェイトは少なからずも驚きを浮かべる。

だが戦いは終わっていない。

すぐに引き締めて握りなおすと、再び飛び出す。

「はあっ!!」

続けて次の個体にアラストルを突き立てると、上に放り投げた。

そして自身も飛び、強烈な縦一閃を見舞う。

その勢いで着地したフェイトは、ここで待機状態にしていたバルディッシュを起動。

『何をしておる!? お前の魔法では……!!』

「分かっています!」

フェイトはアラストルの叱責に似た問いかけに手早く答えると、持っていたバルディッシュを大きく振るった。

飛ばされた衝撃波をもろにくらい、その場にいたヘルラストが全て浮き上がる。

「バルディッシュ!」

『sonic move』

金と蒼の雷が走り、次々葬られていくヘルラスト。

再び大きく跳躍したフェイトは、剣を大きく振り上げ、

「ああああああっ!!」

雄叫びとともに、振り下ろした。

着地したフェイトは、アラストルを背中に収める。
そして周囲を確認してから、ほっとため息をついた。
が、しかし、

「わ、わわわわっ！！わあっ！？む、むぐっ・・・・・・・・！！っぺ！
っぺ！」

ザザザッと音を立てて、フェイトに何か粉のようなものが降りかかる。

そのうちのいくつかは、口の中に入り込んでしまった。

フェイトは本能的な判断で、必死に吐き出しながら口元を拭う。

「な、これ、砂・・・・・・・・！！？」

『ヘルラストは砂を媒介に人間界へ限界する・・・・・・・・倒した
後には砂が残って当然だろう』

「そ、そうなんですか・・・・・・・・」

まだジャリジャリする口で、フェイトは少ししゃべりにくそうである。

『まあ、初めての対悪魔戦としては、上出来であるな』

「悪魔・・・・・・・・？」

『そうだ、お前もここに来るまでに見ただろう？この塔から湧き出
た、数々の異形を』

「・・・・・・・・」

アラストルにそう言われ、思い浮かべるのは最初に接触したガスの
体を持つ個体と、先ほどの巨大な百足の様な個体。

（さっきのにも、名前があるのかな・・・・・・・・？）

早速、アラストルに質問して見た。

『ガスの体に虫の様な本体……おそらくメフィストと呼ばれるものだ、本体が小さい故に狙い難い上、伸縮自在な指を操る』
『巨大な百足のようなものはギガピード、本来魔界に生息する生物なのだが……おおかた、この塔に出現に居合わせ、紛れ込んだのだろうな』

メフィストに、ギガピード

今後必要になる情報を頭に刻んでから、質問を続ける。

「じゃあ……この塔は、何？」

『テメンニグル、別名恐怖の土台と言われる魔界への入り口の一つだ』

「恐怖の……」

ふつと上を見上げてみると、高い天井が目に入る。

「なのはは、一体何を……」

知らずの内にぽつと呟いて、前に進んだ。

第三話復歸（後書き）

今回書きたかったのは、クレイジーなレイハさんと、砂まみれになるフエイトさん（キリッ
それじゃ、感想お返事〜。

ウィンド様

わーい、同士様
wwwwwww

ダンテの登場はもう少し待ってくださいね W W

緑異様

ですよね
wwww
(馴れ馴れしい)

アラストルとフェイトって相性良さそうだなっと思って、
テメンニ
グルに置いときましたww

はい、ハゲ生きてましたww

テネシー様

スパイダの血族つてのは、我ながら名案だと思っていたりww
あと、桜夜の名前に關してですが、なのはと対にしたかったので、
あえて漢字にしています。

それでは、次回もお楽しみにっ（（

第四話とりあえず、合流（前書き）

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・っ」くわつと目を開く

「・・・・・・・・!!」全力ダッシュ

「・・・・・・・・っ!!」飛び上がって

「お待たせしましたあああああ!!!!」土下座あああああっ
!!

第四話とりあえず、合流

「H O - H O - ! !」

次々沸いてくる異形を、なのはは次々斬り倒していく。

大剣ならではの豪快な攻撃、そうとは思えぬ細やかな突き。

時折ロケットのような飛び蹴りや拳を繰り出して、敵を纏めて吹き飛ばす。

「・・・・・・・・・・」

その光景を目の当たりにしていたアリサは、もう啞然とするしかなかった。

一方のなのはは、アリサをそっちのけにしているようで、きっちり護っていた。

今だって、アリサに近づいた異形を、尽く蜂の巣にしている。

「ひっ・・・・・・・・・・!」

衝撃に耐え切れなくなり、目の前で破裂した異形。

アリサは、目の前で仮にも生き物が死んだことと、自身が死んでいたかもしれないことの二重の意味で、悲鳴を上げた。

亡骸に出現した紅い宝石を、疑惑の目で見つめて、なのはは視線を戻すと、

「・・・・・・・・・・ちよっ、なのは! ?」

何故だか追い詰められていた。

柱を背にしたなのははに、複数の異形がにじり寄っている。

というか、さっきまでの威勢はどうしたんだろうか？
あれだけ圧倒していただろうに。

『It is in a seed and a somewhat unsavory situation getting carried away too much. (調子こいたツケが来ましたね、友人の前とはいえ、少々張り切りすぎました)』
「だねえ」

明らかにまずい状況なのに、のほほんとした顔で愛機と会話するのは。

「……………おい」

そんな彼女に、アリサは突っ込まずにはいらなかった。
が、なのはからの援護がないということは、自身も危ないということである。

まがりなりにも、一企業のトップの娘であるアリサは冷静に、確認のために周囲を見渡した。

この場にいる異形は、先ほどに比べて三分の一に減っている。
そのほとんどがなのはを追い詰めに掛かっているが、残りの3〜4体はこちらを狙っていた。

幸いなことと言えば、背後を取られていないことだろうか。

しかし、先ほどのなのはの戦闘を見る限り、目の前の異形達は砂さえあればどこからでも湧いてくることが出来るようである。
試しに後ろを確認すると、大量の砂が山を作っていた。

(……………最悪)

思わず苦笑いをこぼして、目の前の異形と向き合う。

無手のこちらに対し、向こうは全身が凶器。

一部の人間が使用する言葉を借りるなら、ムリゲーである。そんな中で、アリサは覚悟を決めて、思考をめぐらせ始めたときだった。

「・・・・・・・・・・しょーがないか」

「え？」

喧騒の中で、友人の諦めたような声が、はつきり聞こえた。アリサが反応して、意識を現実に戻した瞬間。

異形が一斉に、砂と体液を派手に巻き散らす。

「・・・・・・・・・・は？」

「にはははっ、あーあ、アリサちゃん砂まみれ！」

いつの間にか目の前に現れたのはは明るく笑いながら、アリサの頬についた砂汚れを拭う。

「あ？ああ、ありがと・・・・・・・・・・じゃなくて！」

びしっと突っ込み、息を整えてから、

「一体何よ！？あんたのそっくりさんが出てくるわ、あんたが死んだと思ったらさっさと復活してるわ、砲撃中心のはずなのにフツーに剣使ってるわ！あんたなんなわけ！？」

「高町なのはっていう人間だよ？」

「そーいう話じゃなくて！！」

「どういう話？」

「だーもう！進まねー！！」

ここは仮にも戦場だというに、ボケ（？）と突っ込みの押収が和やかに繰り広げられていた。

だからだろうか、アリサはそのときは気がつかなかった。

なのはが『人間』の単語を口にしたとき、少し表情が翳ったことを。

「はあっ！」

一閃。

アラストルの一撃が、悪魔を一掃する。

雷撃がほとばしり、フェイトが通った通路の床や壁には、派手な切り傷が刻まれていた。

『ふむ、あの男ほどではないが、お主もお主でなかなかやるなあ？』
「そう、ですか……」

アラストルを背中に納めて返事をしてから、ふと、フェイトは疑問を口にする。

「あの、あなたがいう『あの男』って一体……?」

「そういえばお主は知らなかったか……とはいえ、魔界や悪魔に精通しているものであれば誰でも知っている有名な人物だがな」
「どんな人なんですか?…….」

『彼』が一度頷くような声を出してから、フェイトは現れた悪魔を切り伏せる。

その一匹を皮切りに、また次々と沸いて出てきた。

彼らはさきほどからの繰り返しであり、今となってはもう慣れてしまったというか、なんというか。

『大半の悪魔は殺すことを娯楽とし、快楽としている、故に魔界から人間界にやってきては、無力な人間に対して一方的な暴力を振るう』

『しかし……』と、アラストルが区切ると、フェイトのハイキックが悪魔を吹き飛ばした。

『もちろん人間も黙ってやられているわけではない、故に、悪魔を狩る者……悪魔狩人^{デビルハンター}が出現し、人知れず人間を守っているのだ』

「……もしかして、あなたの言う『あの男』も?」

『そう、悪魔狩人だ……。それも『最強』がついた、とてつもなく強い、な』

フェイトの脳裏に、筋肉隆々のガタイのいい男がアラストルを振り回す光景が浮かんだ。

少なくとも、アラストルが心臓に突き刺さって生き残るような人物だ。

そんなものが最強だと言われれば、素直に頷いてしまいそうだった。

『奴はこれまで四度、世界を救っている……本人はそのつもりは無いらしいが』

そう言うアラストルの声は、呆れながらもどこか懐かしそうで、
フェイトは思わず、くすりと笑う。

『しかしここ最近はなりを潜めているらしいな……一体何が
あったのやら……っ』
「…………っ!？」

そのままの声で、アラストルが続けた瞬間。
目の前で通路の壁が派手に破壊され、砂埃が舞った。
フェイトは思わず構えて、神経を研ぎ澄ませる。

煙の向こうで、動く気配。

「ったあああっ!!」

こちらに向かってきたそれに、躊躇なく刃を振り下ろした。
受け止められたとはいえ、手ごたえ有り。

『…………この気配、もしか……………!？』

衝撃で、砂埃が晴れる。

そこにいたのは、

「あれ？フェイトちゃん？っていうか、それ……………」
「フェイトなの!？」
「っなのは!？」

なのはと、それに連れられたアリサだった。

なのはは大剣と化したレイジングハートでアラストルを受け止めており、驚いた表情を見せている。

フェイトは一瞬ぼかんとしたが、すぐに剣を引いて背中に収めた。

「ごめん、ここまで敵だらけだったから、つい……」

「いやあ、いいよ、それよりちょうどよかった、アリサちゃん頼んでいい？」

「つちよつと待ちなさい!!」

笑顔のまま、フェイトにアリサをまかせようとするのはだったが、当の本人は拒否の声を上げる。

「まだあんたのこと聞いてないわよ!? そっくりさんのこととか、その格好とか、剣刺さっても平気なところとか!!」

「剣!？」

確かに今のなのはは不明な部分が多いが、フェイトはそれ以上に、剣が刺さったというフレーズに驚いた。

「アリサ、剣って一体!？」

「それが!なのはがこの格好で助けに来てくれたまではよかったんだけど、あたしとすずかを拉致ったなのはのそっくりさんが、なのはに剣を突き刺したの、しかも胸に!!」

「っ本当なの!？」

「……本当だよ」

詰め寄るフェイトに、なのはは少し申し訳なさそうに笑って答える。

「でも大丈夫……傷はもう無いし、別に問題はないから」

「傷が無いなんて、あるわけない！！なのは、ここは……！」
「それよりも」

なのははフェイトの言葉を明るいついでわざと遮って、背中のアラストルを指差した。

「それ、アラストルでしょ？フェイトちゃんこそ、よく無事だったね」
「……………！」

『よく無事だった』と口にするということは、アラストルとの契約方法を知っている者のみ。
フェイトの目が、大きく見開かれる。

『……………やはり、か』

ここで、今まで黙っていたアラストルが声を発した。

「初めましてアラストル、なのはです」
『なのは……………そうかお前が……………ダンテは息災か？』
「はい、たまに連絡が来ますよ、多分今頃中東あたりじゃないかな」
「？」

のんきな声で、親しげに会話するのは。
アラストルは、ため息のようなものをついて答えた。
くすくすと、もう一度なのはが笑ってから、表情を真剣なものに切り替える。
それをフェイトに向けて、

「フェイトちゃん、アラストルも、とりあえず忠告ね」

「……………な、なに？」
『……………』

いつになく真剣なそれに、フェイトは思わず身構える。
なのはは一呼吸おいてから、

「^{トリガー}引き金だけは、使っちゃ駄目」
「……………え？ちよつと、それどういう……………」

『こと？』と続けられなかった。
フェイトと、今までの成り行きを見守っていたアリサ、二人の視線の先。

ついさっきまで会話を交わしていたなのはの姿は無い。
どこに？、と、二人が顔を動かしはじめると、

「こつちこつち！！」

通路の突き当たり、四つ角になっている場所。
はるか離れているそこから、元気な声が聞こえた。
そこにいたなのはは無邪気に手を振ってから、開いている手を口に
そえて、

「フェイトちゃん！アリサちゃんを安全なところまでよろしく！
すずかちゃんはこのちで助けるから、心配しないでー！！」

「ちよつ……………」

「どうやって……………！？」

「あとー！！」

こちらとあちらを交互に見てうるたえる二人を他所に、なのはは続ける。

「人の家庭事情に首突っ込むと、嫌われるよー!？」

「っ余計なお世話じゃあああああ!!」

アリスの突込みをもともせず、無邪気に笑いながら去っていくのは。

フェイトはしばらくの間呆然としてから、

「・・・・・・・・・・なのはって、何？」

「さあ？」

第四話とりあえず、合流（後書き）

大変長らくお待たせし、申し訳ありません、四話でした。

言い訳すると、いろいろとさらに悪化しちゃうと思うので、あえて何もいけません。

それでは、お返事いきます。

お待たせしました、すみません。

T e a 〓 R i v e r 様

あの男の実子なら、これくらいはっちゃけてもいいとおもいます（キリッ

孫娘かどうかは、後ほど詳しく書くと思うので、行く末を見守ってくれると幸いです。

D e v i l S t r i k e r 様

『血族入りさせちゃえば、規格外な魔力量も説明つくんじゃない？』
と思ったのが始まりだったので、ぶっちゃけ自己満足的なものです。
あと、D M C といえば、キャラクター達のはっちゃけっぷりでしょ
う w w w w

珈琲牛乳愛飲者 来栖様

なのはさんをスタイリッシュに書けているようで、一安心です。

血族式成人式 w w w w じゃあなのはさんとフェイトさんは成人した
のか w w w w

ネヴァンがくると予想していただいていたようですが、鎌の二刀流
って面倒くさそうだなっと思ったので、あえてアラストルにしまし
た。

あと・・・はっちゃけたレイ八さんに笑った時点で、あなたはわ
たしの術中にはまった！！・・・すみません o r z

さて、今回はここまで。
次回をお楽しみに、それでは！！

第五話はやて、考える（前書き）

思った以上に難産でした・・・。
完結できるのかこれ？（汗

第五話はやて、考える

アリサちゃんはフェイトちゃんに任せただけから大丈夫。

今頃はやてちゃん達が保護しているはず。

すずかちゃんは・・・あの子がうまくやっているだろうから、大丈夫だともう。

あと、さっき知ってる人が二人も来たみたいだからから意外と早く収束しちゃうんじゃないかな？

・・・とりあえず、

「わたしも一発入れないと」

『It cannot be forestalled.（抜け駆けされるわけにはいきませんね）』

自然と笑みがこぼれて、何でかテンションがあがったので、速度を上げることで発散しました。

「とにかく、アリサは安全なところまで送るから」

「わかったわ……なのはこのことも気になるけど、この際しょーがないわね、あとで洗いざらい吐いてもらうんだから

！」

「あ、はは……」

あれから。

フェイトはアリサを外に送り届けるため、一路出口向かっていた。アラストルを振るい悪魔を薙ぎ払いつつ、アリサを護衛し前進する。しかし、襲ってくる悪魔の個性が強いこと強いこと。

刃を持った案山子のような悪魔、素早い身のこなしで攻撃してくるトカゲのような悪魔。

人形のような悪魔に、体が燃え盛った犬のような悪魔まで。

「どんだけバリエーションあるのよ!？」

『知るか、我ですら把握しておらんのだから』

あまりの種類の多さに突っ込むアリサ。

それに対しアラストルは少し呆れたような声で返し、フェイトは苦笑いをしていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・う・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・・・？」

気絶していたらしい。

何かに揺られる感覚で、すずかは目を覚ました。

ぼんやりする頭で目を開き、ピントをあわせようと何度か瞬きをする。

やつのことではつきりした視界は、少し変だった。

天井と思われる壁が目の前にあり、その手前には見慣れたようで見慣れない顔がある。

『顔』？

「・・・・・・・・・・！？」

「・・・・・・・・・・っ」

思わず飛び上がったすずか。

もちろんそれを抱えていた人物も、つられて崩れ、床に倒れこんでしまう。

「・・・・・・・・・・驚くのは無理ないけど、少し手加減して欲しかった」
「す、すみません・・・・・・・・！」

すずかを抱えていたのは、先ほどなのはが戦っていた少女だ。
確か、桜夜と呼ばれていたはず。

すずかは自力で立ち上がりつつ、あたりを見渡した。

なんらかの廊下らしく、薄暗い。

目の前には桜夜と、スキンヘッドがいた。

「・・・・・・・・ついたぞ、ここだ」

どうやらあの後、いつのまにか連行され、いつのまにか彼らの目的地にたどり着いたらしい。

巨大な扉が聳え立ち、その畏怖と威厳が隅から隅まで滲み出てきている。

すずかは本能的にそれらを感じ取って、思わず後ずさりした。

「恐れるのはかまわんが、逃げてもらっては困る」

重々しい口調で、スキンヘッドが口を開いた。

その重圧に思わず肩を跳ね上げたすずかを他所に、スキンヘッドは続ける。

「しかし・・・・・・・・皮肉なものだな、スパイダが封印したこのテーマソングルを、息子が解き放とうとし、その姪が再び封印

をやぶろうとするとは・・・・・・・・」

「・・・・・・・・どうでもいい、さっさと開けなさい」

「まあそう急かすな・・・・・・・・」

男は、くつくつと嫌な笑い声をあげて、扉に手をかざした。

口をもごもごと動かし、なにかの言葉を唱えると、扉が震えだす。

扉が開き始めた瞬間、隙間から漏れてくる、ねっとりとした殺意。

すずかはそれに恐怖を覚え、一步一步後退し始めた。

「その後退は恐怖からか・・・・・・・・ふふふ、それもよかろう・・・

・そう、恐怖だ・・・・・・・・その恐怖が、魔剣士の伝説

を作り上げ、人々の信仰を集めた・・・・・・・・」

途端にスキンヘッドは声を上げて、愉快そうに笑った。

「今度こそ……今度こそ手に入れよう……さあ、行くぞ」

「……ええ……ほら、こつち」

桜夜はすずかの腕をつかみ、スキンヘッドに続いて扉をくぐっていく。

強引に引つ張られ、すずかはバランスを崩した。

倒れかけるも、桜夜が抱きとめてなんとか難を逃れる。

……その時、ちょうど互いに密着しており、たいていの小声なら聞き取れる距離にいた。

桜夜はそれを待っていたのかもしれない。

狙ったように、すずかに口を近づけて、

「……ごめんなさい、でも、もう少しの辛抱だから」

「え？」

疑問の声を上げて聞き返したすずかを無視して、桜夜は何事も無かったように歩き出す。

その後姿を、すずかは懐疑の眼差しで見つめていた。

「はやて!!」

「っフェイトちゃん!? アリサちゃんも!!」

塔の外。

アリサを抱え飛行していたフェイトは、無地はやて達と合流。

シヤマルにアリサを預けて、現場リーダーであるはやてに今までのことを報告する。

悪魔のこと、なのはと瓜二つの少女のこと、アラストルのこと、テメンニグルのこと。

現時点で知りえていることを、アラストルに補助してもらいながら話した。

それらを聞き終えたはやては、みるみる顔を驚愕に歪ませる。

「悪魔にテメンニグル、加えてなのはちゃんの豹変…….
なんや、随分と密度濃い案件やな」

そうばやいて、顔をしかめた。

フェイトはいったん頷いてから、

「それにアリサの証言によれば…….なのは、確実に心臓突き刺されたはずなのに、未だにピンピンしてるんだって」

「…….何それこわい」

げんなりと、はやてが返した。

その表情にフェイトは思わずっこけたが、何とか持ち直して、咳払い。

「でも、なのはが重要参考人であることに変わりはないよ、そのそ
っくりさんのことも気になるし」

「せやね、今はとにかく、この案件の解決や」

「っていうか」と、はやては一旦ここで区切って、

「フェイトちゃんも大丈夫なん？今の話からすると、フェイトちゃんも心臓刺されたことになるんよね？」

「あ、そっか……その辺はどうなの？」

握った手を開いた手のひらにぼん、と乗せて。
フェイトは首を動かして、アラストルに問いかける。

『私の場合、一時的に魔力を注いで自然治癒を促進させた、まあ、

『あの男』はそれすら必要としなかったが……』

「どんだけ規格外や、その人」

『我からすれば、人の身で空を飛ぶお前らが規格外だ』

心臓を突き刺されても、アラストルの自然治癒促進を必要としなかつた男がいたこと。

それに対しはやては突っ込みを入れたが、アラストルに返されて、口をつぐんだ。

『何はともあれ、悪魔には非殺傷とやらでは太刀打ちできんぞ、銃や刀のような、殺す武器でないと難しいだろう』

「そうか……ご協力、ありがとうございます」

『構わん』

アラストルに礼を述べてから、はやては改めて考え始める。

あの塔 テメンニグルが、危険生物が跋扈している異世界へ通じる入り口なのだというのなら、この世界は文字通り地

獄と化してしまうだろう。

魔法を扱える自分達とその周囲ならともかく、70億以上の人間が危険に晒されてしまう。

いくら管理局でも対応できない。

ましてや、相手は自分達の魔法がいまひとつ効かない相手なのだ。万年人手不足の組織にとっては、大打撃以外の何者でもない。

さらに、はやてが気になっていたのは、さきほど塔に突っ込んでいった二人組みの女性。

ジェットスキーに二人乗りし、妙にハイテンションで進軍していた彼女らのことも気になる。

そして、もつと気になるのは、証言に出てきた『なのはが、心臓を刺してもピンピンしていた』ということ。

もしそれが本当なら、なのはは普通の人間ではないということになる。

今のところ、自分達の中で一番テメンニグルについて知っている人間ということになるが……。

「あかんなあ……友だち疑うとか、いやな仕事やわ」

ままならないと言わんばかりに、はやてはため息をつく。

「bingo!!」

「blast!!」

「shoot!!」

「ha-ha-ha!!」

嬉々とした表情で、大剣を振り回し、銃を乱発し、嵐のごとく悪魔に飛び掛る。

接触した悪魔は文字通り吹き飛ばされ、あるものは蜂の巣に、あるものはスライスされ、血と一緒に赤い結晶をぶちまけた。

なのはは一度足を止めると、めちゃくちゃに剣を振り回し、周囲にいた悪魔を壁ごと斬り捌く。

殺意と欲望の塊である悪魔も、ここまでされては恐怖を感じるらしい。

同胞の屍の上に立ち、真っ白な肌とコートに返り血を浴びたその姿は、狂気や恐れを通り越して、威厳を感じさせた。

「.....あははっ、I'm absolutely crazy about it!（楽しすぎて狂っちゃいそう!!）」

無邪気に笑って、銃口を向ける。

第五話はやて、考える（後書き）

見返してみると、はやてが考察する部分があまり書けてない・・・
・・・orz

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2321v/>

魔剣士少女リリカルなのは

2011年11月21日18時52分発行